







源語忍草卷之三

目錄

後のう海

むろのう枝

若葉上

まじり枝

後のう葉

同下



ゆりばあま

玉草と内侍ふあつたははるあまのききりて
 玉づつふひをへむ親めを給ふ源の山公さへおとけまど紀
 伊公とえの海あはゆしてまがひて人をもまがひて帝は清ももつて
 あま清姉の弘徽殿の女清秋よのむ中まあまの山公おまを給ふ
 けふくらりてととひれ^{まがれ}ておのむとたまあつてまあつての書
 うらみとえとねどは巻4夕暮を玉あつては清服^がありてあけ
 夕暮の巻よりの宰相の中將あり今まあつての^{兄弟}あつて
 夕暮あつてまあつて今あつての^{兄弟}あつてまあつて
^蘭らふの苑のおもてまあつてあつてまあつての清あつてあつて

終ひて人の世なむしたせとれおひて源の侍はし海を
 きのとれいふ人のいささのそ侍兼のそ人おまの
 空をいげぬくまへいひほけてもら終人いりらふの
 花をみもの下よりいりて是も侍兼いふ人あり
 して侍て指あを玉うづり何をもあまきいふ神をいりて
 明して夕暮り

同様の書よのいふ侍兼ありいふいふいふいふいふいふ
 侍のい玉うづり

たづねふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 らみとら^蘭の花あのみぬらむとらふいふいふいふいふいふ
 柏木の

中將と妹ともいふて胡蝶の巻ふふあどはのせしよとて
 今ふ恥し梅しうあひて肉土長り侍はふふのあふふ
 柏木の中將

いとせ山とくい夫婦のあはれやうんはゆきとあふてまなり
 結断
 いとせ山とくい夫婦のあはれやうんはゆきとあふてまなり

兄身
 玉めつ

十月より玉うづり因書入おのすづいといふいふいふいふいふ
 舞黒の大將たき侍兼あどいふいふいふいふいふいふいふ
 終て文をいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

比大將の只今の春宮の弟伯父より比春宮の朱雀院の皇子
をの左を傳習と武部卿の言はし皇子紫の上の弟見をり

真木ぞり

盤黒の大將と石山の観音へ三預をどして無のおととくは
玉ころくは女房月公何とせ押して玉ころくはひあつて里源何
まど記仕方と下ふの立後へ移へど始よりと強と掟ふ
忠あひぞりへ一也今やとどがめんととんがあふおそふに
若孫ふ玉昔の思ひの御ふら記紫のに候きゆへは弟父
肉大長の内へかくも何事なりと思ひしつとあまじきなれそ

暁ひ孫ふ盤黒の年三十二をり北の方の武部卿の言はし弟娘
紫の上の弟姉の公達を何まこと物と初く盤黒玉ころくは
心を分給ふべとて言ふも何しけりへど年月物けふ故ひ
孫ひて現をもあくぬあつて盤黒玉昔ふ心を編へて
水の方物のけはねらうぬ時を公とえもつりて人なまは
大將玉ころくはみ成りたりやがてはうへん中よりして
紫の孫へたどるりく後里孫へは孫も三孫りすむけり
何のりまひもあけ違ふりて侍へんが弟父武部卿の言はし
何しを此候めてとまんと思ひとどつて何んあどはみ盤黒を
ゆりて出あんと日内言ふるふをうたをなづくふりて

行くけふの給りも福もてもまらぬ給ふをけ違どれどもあつ
 ひとごとくげふおあひの足指て給をもさくつにしてあつてし給
 吾を誂めて給ふなり一記を水の方をねあひしていつては吾を
 分りしん吾も更けよふ出ると。そをけりし給ふは吾にいつて
 新むとありあつては化粧してちひされ火とるまよせ神ふ
 引入てき記をぬおあひの方より神しておのせりつものけ
 おろしてよと起出業義の下にひて白りけりつあつ火よりを
 吾出り大將のうらふよりてまつとけめけあふ大將のうらと
 何とされあふ子御あつては目鼻ふ入りの構多とまらたは使おれが
 小神もねむり給ふと給へり現公にしてめり給うはまらつて

ものあひ違どおの怪の志つと給ふが清まへの人とも
 とうら見たまふおの方癒つ東位りつ志の若くがの給うが大將
 玉つつしとえつてつ給ふて又はつりし給へり盤屋大將
 命と人おふれきりし吾もよふひのまらつてつりつ一記の神
 玉うつしは盤屋のわら給ふねを何ともおとねがはしともあつてん
 何れもつ東大將玉うつしつりつ給ふおの方の物のけおつり
 りつておのふ違どあつてつりつては神が御しつてまらつてん
 怒りけ違どおの方おつりつりつあつ付給うす公達とも給ふよびて
 足あふつりつあつて給ふねひつりつてつりつて二人ねつりつけ
 式形那のまらつ給ひて盤屋をまらつて引つてあつて給ふひつりつ

あつひに孫女をのりて孫女をも面目あらんわしあまべ一只素
清めく人味もひとあつて備ふ山近ひはりのり孫女時一も
わりの方と親おふぬて孫女が今と親の清めく人立降むも
おふれう。わつてとつてあまげとあつておひ礼をまくの西舟の
中将侍佐民部のおまあど山近ひにおおりのついであふ今日を
限りとあつてあつてあつてと孫女くつ娘君の孫女いと
とつて孫女が今わつておつてとつてとつてとつてとつてとつて
孫女を母君のりてすつて孫女を母君のりて孫女くつ
わつての極内ひのきふ書てわつてわつてわつてわつてわつて
今わつてわつてわつてわつてわつてわつてわつてわつてわつて

母君

到いよのひおひおつて何あつてとつてとつてとつてとつてとつて
はあつて娘君を孫女のとつてとつてとつてとつてとつてとつて
孫女が父の文納つて孫女をとつてとつてとつてとつてとつてとつて
事おつて娘君をわつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて
あつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて
式納つてわつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて
とつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて
孫女は月お踏つてあつて踏つてとつてとつてとつてとつてとつてとつて
とつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつてとつて

廻るよりの花を帝と婚との女帝を言ふは物もみよ首
 内侍のあまひびきび内入りの帝に目もみよあつてまにのあつと
 かのあまひび踏を言ふとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 よれをいふはくてもは婚との大徳のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 新あまもあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと

あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと

あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと

あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと

あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 あまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと
 帝のあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびとあまひびきびと

徳の由も終りし源

花の枝よいとををさむいふ人なりとてあはれきりつゝをど

はついでふゆめいとのほよせありきまもつゝををさむひては夫より

数多とて試せしきつゝも兵部卿のまふ呂無を極めるとはま

祓院のの黒方源のの侍は雲の上はと梅花とふ教里の花葉

何れは清方ののたえり何事と面白くと呉め終りてををさむ

を判判者なりと嫌ひあひ終り月とておぬまの酒宴始りあひ

源筆はもと多勢卿のまはは色柏木頭の中將の和琴とてどのの

宰相の中將の横笛柏木の侍身兵の少將の物子とて梅うえ

ゆとて洞のちどいと面白うのちとてぬて多勢卿の御のあま

多と付ぬきたるその二重侍おき来つゝだりおくるもはあ

多と終りしが兵部卿の文

花の香気とありぬ神は神とていとあまのちのちとてあひ

源の一人一源

あつゝと古く人と結ぶとてむ花の綿をさしてあつゝを

町とて来兵少將とておつゝの物はつゝ終りぬ君力のとてあ

源はつゆの腰ゆひみ秋好む中ををさむのち終り春宮の

源之後の二月廿日あまのちあり源の姫君の入内おをなひてを

ひとてきたの大臣の侍娘も入内延をを源ををさむひてあ

まはつゝのちの先向道とてをさむとてあつゝを終りては姫君の

八月をたぐへんがその時の左大臣の三の君より多くて藤原家の

女卿といふ源を娘君の書物などもとれ書物そのをせよみ此系なりと

にもめしせよと終り多の源の念左使の智紫の上りゆらめこれ

兵衛將文五方柏木にも書せよ一の源もよる處といふななふ

おのて源公のりめあつとゆべらゆまの風をわけて書屋つくあつて

源公つゝ一の草紙歩をぬきおとせよとて兵部卿のまわりの終り

源公とせ終ひてゆ終らずおがすづれてもめぬゆまよみと好まう

面ゆく書あつ終りぬきゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

なつと終りゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

書あつたつゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

見まうけはむお招のみ目も終りゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

服におがせりしひるん中務のまこといふまゝにいと世に
せんとおひて海まきりしはるかと世の中ふまははまれば
内大臣の侍御つがまてまをひつふせんとまゝのまゝ
伯父の内大臣とお娘と孫まゝと娘と世に娘の雲井の唐とが
志道がくは娘とあゝとふのまに持まゝとまをせし
まのびつとまふまはつりし孫まゝの孫まゝの唐とま
まゝとまゝとまゝとまゝと内大臣のまゝとまのまゝ
おつとまゝとまゝとまゝと中務のまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝと

はまのまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
中務のまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと

後の方へ葉

侍妹の娘君の内大臣のまゝとまゝとまゝと
おまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと

花の舞ふ舞ひ終る春の花ちりまんとて始一見母よりの花の立
舞く舞くそ咲きなにかさかす何とね母がえ終るまをまよりの一見
ゆりまに一つべりてお母の舞を終るの時分よくとつとつひと
内大臣の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
終て冬ごりの舞をうら舞の舞のうら葉のと咲く終るを
を終る冬ごりの舞のうら葉のと咲く終るを
ふあまんとつと舞を終るをうら舞の舞を終るを

内大臣

紫の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを

文部省

歳入の舞のうら葉のと咲く終るをうら舞の舞を終るを
酒宴として舞をうら舞の舞を終るをうら舞の舞を終るを
入るる年月をうら舞の舞を終るをうら舞の舞を終るを
内大臣の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
賀茂の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
乙女の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
内大臣の舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを
舞のうら葉のと咲く終るの柏木花の舞を終るを

恒せ終ひ三糸の家人の方とほを終ひて編く事く恒あり

太政大臣

文がねの事を知りて悦びて更十月廿日あまりに六条院へ行幸河の是も本年の序賀を序賀ふあそく始り終り

朱雀院と序賀をより六条院の田地をいよりけりあり序賀

通て後樂入る一殿上内わりのくふ舞を海に終ふわらを

おととの若君十どるを舞はとも舞あふよく出さね舞が帝

所衣をぬがせあひて下さる涼菊をわあひてむり一紅葉

の賀の巻ふ青海波を舞あひるまを只一出て六条院

まほさう離の菊をわかに神行ふけし秋をいよひ

ねとをわあひて舞あひるまを只一出て太政大臣

紫の雲ふまぐらと紫の花あをりあそ舞の早うとぞいん

朱雀院序賀

秋をいよひ舞あひるまを只一出て太政大臣

帝序賀

君君のりみりとやいん吉の例ふひけ秋庭のりいん

とゆめいんせあふ四つういふくねびとれりせあひて六条院ふ

あとのりび舞あひる四糸と足人とせ終り

わつなよ

朱雀院と後の書葉ふ六条へ序賀わら恒がりにぬる

兄弟に右中年よりいふそのつりその人をりつて内院を授く等と
多入り先免南女三のこゝろ小寺堂あまのやまに宿まんとしておろしをたぶを
寺務たからのよりゆひお呼せ給ひてけりといひその宛てて後朱雀院
寺たからがらわらせり六条院寺務たからのよきり給へども朱雀院
取合せのひてをゆへの西物授どもゆゑて女三のふれけたを
よりほのめりし給へる公のにおよぶ限りの西條さいじょうにけり海河の
どけきとしりるふりめをうらひをまじつてゆゑと佳訂多ひて
神り給ひぬ紫のよきめりし西定めをゆひておのせ給へども給へるの
御院をともきくにゆひめを分けしてゆゑりふおいとを疎あましく
お給へぬが海河と向ふては何れをもおきておつては海河もたはを
はりまひてゆゑにお給へる源の寺をけりしおろしを疎あましく海河も
たはを紫のよよりをまひふべしと名止なやしふりし源とてゆゑりと
よりし給へる海河のよきまじつてゆゑりしおの河のこころを
まじつてし女三のまの給ましとてし女三の母寺のゆゑりしと
疎あましくお給へるおとをあらしてゆゑりと卑下ひげとて女三の寺母と
紫の上の寺父式部卿のまゝとてゆゑりしおのよきまじつて母方おの
ての女三と紫の上とをゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
海河もたはてて互におまじつてゆゑりしおの河のゆゑりし朱雀院あまに
ゆゑりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりてゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの

たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの
たはをけりしおの河のゆゑりしおの給ましとてし給へるゆゑりしおの

終子と才しをみえりしくむらものもあつり一にひまはしつ又
ゆりてはくしてへとせし様入してえしく結盟をりて
戸との好むが海をもひえりてきりうへと物おどりしてまぐ
ゆいぬいちの好むがとがにせはぶいとひくき子入て姉一人
弟のわづろ終ふとせしお終かうらるへと終ひはわがし
かねどもあるはま何つめきうひあつりの紫のうぶまん
ふなりと云の内ふひくうくくは夜言潤ひてその東の晴^{わづら}き
里のりて後朝のぬとておをりてせしおく又をわてん
そりてそ又のりて後朝のぬとておをりてせしおく又をわてん
さばせり又三日おはて後朝のぬをほりてとくあや

源女三のまににんしおむはづりいあかおむおはくろひておん
紙ふ六巻院

中らと揚^{たか}るほどいあされどもおれう今朝の陰香

清う入一女三のま

まのぬくそうりのまはむむまおむおの向ふ海^{うみ}のまの陰香

ゆりてはくしてへとせし様入してえしく結盟をりて
戸との好むが海をもひえりてきりうへと物おどりしてまぐ
ゆいぬいちの好むがとがにせはぶいとひくき子入て姉一人

弟のわづろ終ふとせしお終かうらるへと終ひはわがし
かねどもあるはま何つめきうひあつりの紫のうぶまん
ふなりと云の内ふひくうくくは夜言潤ひてその東の晴^{わづら}き
里のりて後朝のぬとておをりてせしおく又をわてん

そりてそ又のりて後朝のぬとておをりてせしおく又をわてん
さばせり又三日おはて後朝のぬをほりてとくあや

源女三のまににんしおむはづりいあかおむおはくろひておん
紙ふ六巻院

中らと揚^{たか}るほどいあされどもおれう今朝の陰香
清う入一女三のま
まのぬくそうりのまはむむまおむおの向ふ海^{うみ}のまの陰香
ゆりてはくしてへとせし様入してえしく結盟をりて
戸との好むが海をもひえりてきりうへと物おどりしてまぐ
ゆいぬいちの好むがとがにせはぶいとひくき子入て姉一人
弟のわづろ終ふとせしお終かうらるへと終ひはわがし
かねどもあるはま何つめきうひあつりの紫のうぶまん
ふなりと云の内ふひくうくくは夜言潤ひてその東の晴^{わづら}き
里のりて後朝のぬとておをりてせしおく又をわてん

そむきたり一以世みおとせむも入山道のあざりありをれ
序より一ふらふとあり一それごとく一^{しんせき}軒殿一終りて
あり一そむきおとせむも一紫のこ

そむくよのうらうあそくばらうがむ月女一或法てあけあそか
わして序寺お袖ひまが今つと女序ま衣違おのく極く
わたり終り花の宴の巻お海邊そあ終り一終月乃者侍を
二条此まといふ序父右大臣の家へゆり終り源のあそわ
あつげり一序中あまの今つてこい遂て酒舞のせり花の
^{ちりき}鳴も終りまありくてもい一序役まどせ一中納言といふあ
河うそれを由使めて念はふちあひひ思ひて二条へおりて

と海くたのあふ肉侍と米菴院の序まあう一うらうがむ
あそこのあひひあひをうらうそとより源おひらき一由公あま
を終りくもえそとあり一終りて遠より十甲を年福隔ての
序對面よりねが珠一そむきやま一けり最の巻終り巻う
十二あて春宮一とあり終り一源の姫君はまよりのまよるはは
成るあひまう一序年をゆり終りたあそくもまづつるせあひあつを
よりの^る襟にもあひひ肉書お居りあそひあそびは姫君と源の
序母の住より一あそひあそびとて別相まよるあそひ相まよ
の息あそひあそひ懐妊あつと六条院お出あそひあそひの住あ
新殿とあそひあそひあつとあそひあそひのあつとあそひあそひの

伊息不を任せたり給ふ女侍不幾多ひてハ親達の言行より
よき業の上の由り入給ふよりけりけりあけまがあてり
通年業のし入り給ふけりやに女三の言にも對面せしと
源子同く入給ふまてまがけのこねんころふ對面して
よきげよくおし入ると言ふ由の業の上の由り
むつよ〜とある由物語とゆへにせきり〜あひて中村を
明て女三不對面〜給ふ女三の由めれとを言出て本書院より
あての女侍給りせたる〜後のいよくおし入るふ由の言
解多き身給まがけのづ〜わらわら多め〜ん左様の時を
お神ころ保用ひよ〜給ふあどひひおとせあると念比よのあひて女三

あは伊知小ほく〜雑ひのあ務をとりまを修くりまふごなつく
よ記人かとおとけ給入りゆて後の再ま〜あを〜めり〜りおし入
あは伊知小ほく〜あひの中より取り〜ぬりあふ業の上を
源乃伊子のや〜けて生か〜あゆ人十月小源乃伊知とせし
あふ伊知ひなま〜りて文ど〜里板木青海波を尋あ入り十二月
廿日小秋このむ中宮内よりあせあひて是も伊子かあまご
伊知をせし給りあふ帝よりとあて候つ〜あを中納言〜と
右大将ふとせあひて伊知代小文どりに伴付らる。本年のりね
伊息不の伊知を尋つ〜おまが二月一日より伊知候はを尋つ〜あ
あてなり。社ヤ〜の伊知待教あひ二月より伊知候は〜りりて候は

姫君國母と成多ひて給たまひ満みちる日ひふ預よをほたたせ給たまへ
 今の御みよりみままなほ遠とほ西しの十じ百ひゃく億いっぴやくの國くにを隔へだたす
 九品くしゅう力ちからよの品しんとし証しやうひたうく成なほ遠とほ近ちかむる蓮れんをつららども
 水みづ子こ信しん山さんの末すえ少すくて給たまへて海うみうらい入いぬと書かて入い道だう
 光あき射し唯ただちちううくく彩さいりらにに今いまぞぞんん世よのよ星せい流りゅうにに
 余あま終はるる月つき日ひとと忘わするる一ひと百ひゃくとと空そらううてて思おもふふ姉あねががおおりり
 多おほくくべべ唯ただああままとと愛あい化かののとと思おもふふ老おい法ぽう師しが
 幸さいめめにに功こう徳とくをを引ひくく多おほくく人ひとびび世よのよ樂がく一ひとたたくくてて後ご世ぜを
 忘わするる多おほくく形かたちののああままのの御み事ことのの子こ對たい面めんののけけんんとと書かて預よ文ぶんも
 多おほくく對たい一ひとうう多おほくくおおととせせりり明めいるるおおやや子こののああままととてて流りゅう
佛國

せせとと思おもふふくくくく我われももふふたたのの儀ぎののけけてて給たまへへけけののいい
 給たまへへとと露つゆああるるなながが教きやうああぬぬ身みとと言いふふたたままどどららののをを好このむむ
 お思おもひひをを給たまへへとと給たまへへ一ひとのの事こととともも今いま思おもひひ合あははれれ給たまへへ給たまへへ
 形かたちととももたたせせてて明めいるるのの西せい方ぽうのの清せい息そく系けいののおおりりまま久く病びやう給たまへへ
 わわくくととああひひてて人ひとののああままとと時ときああままののくくとと後ごううてて西せい息そく系けい入い道だうのの
 多おほくくとと思おもふふ給たまへへ時とき一ひともも源げんわわののああひひてて何なにぞぞととたたづづ給たまへへ
 多おほくくとと思おもふふ給たまへへははるる法ぽう作さくののおおももおおももふふううくくききののいいととけけ
 今いまににおおももののべべおおもも守まもりり一ひともも入い道だうのの預よををみみししととてて
 并ならひひ給たまへへいいややああままとと思おもふふおおももららうう給たまへへ給たまへへ給たまへへ給たまへへ給たまへへ給たまへへ給たまへへ
 源げんとと思おもふふいい何なにのの西せい物ぶつかかららののけけいいででおおもも源げん西せい娘にやうのの榮えい給たまへへ給たまへへ

はまの後の二冊ありてはつめふらした物ありらぬ侍をしてさ
らして此の簾のすまひがまゝにうらうの月几帳もさぞけなく
押入のたふふもいとたふらう猫のほろつたをさかよりたま
ねる猫入事してくひのくもふおぼしてめく猫の侍簾の介つて
おろ物ひ小物おぼたう細めて此簾を引つけこれのくも
膝しもさうさうひして侍簾のめくおぼもつた女こも
膝もしてねふまもひて居多しと右邊の侍おぼく見ま
た簾の簾のめくもをさうけのくもつてこおぼひ
あつて侍もさう侍簾をさうねはよりの物もたつておぼ
ほくぬて小侍たうて入見をさうておぼのさうしておぼ

おぼをさうて右邊の侍

よまてておぼぬあげおぼおぼもおぼひらおぼの侍
と侍もさう侍たうのくおぼく見まひとおぼひもさうおぼ
まのくもをさうておぼおぼをさうおぼの侍あるさう侍た
おぼおぼ侍簾もさう侍のくもはいておぼおぼ侍たて
さうのくもさう侍たもさうおぼおぼおぼおぼと
侍もさう侍の侍もさう侍のくも侍らんと侍らもさうおぼく
さうおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼ
おぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼ
おぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼ
おぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼおぼ

よにわさしとあそびてかづとあはれあはるる里と夕暮りの
市母分りあんと源のありあはうと夕暮りのまじり
そり朱雀院の浄通世のふれあはうと夕暮りのまじりあせど女三
のふふ今つてび浄対面あはれは世と離る時を
ねふあふんとあふのふより源傳へあせ給ひて^{あふの}あふの
あふに満とせあふの浄あふのあふをよりあふのふよりあせ
浄対面あはれとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
孫あふあふとあふとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あふのせあふ女三のあふのとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
源のあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと

あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと
あはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうとあはうと

ちぬ紫の上の女三のふみ侍おつりてとらえあひてあつて咲きふ
 神りあひつた日源人のひきおどる事宣お終ひ出て
 紫の上の和琴出さたりとふあつりてとらえあひつりひも
 のち侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 せきふめつたたしひねる余りくさおと源をひま
 ちくあふふましてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 せりおどるせ侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 源内侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 六条のちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 あつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ

明りあひ女三の和琴をよくとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 女三のちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 ちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 まつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 ちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 源内侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 同くつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 源内侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 ちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ
 源内侍終びぬともすべしとめとつりておどるおどるひあはれ山さゆ
 ちやんあつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえあひつりてとらえ

巻よりばあ某のよめとの帝女の今の階ふあせあひて
冷泉院と申すは新より紫のよりの西あやこよらうらこたを
敬て養生せんとしてその清浄二条院へ移し来り世所初
とて教を以て柏木の古殿の傍の比中納言ふぬあを今
帝は四よとの時をよまば親しく思さるる時の人をよまの
世のよのよくぬふけとも思ふよの叶りぬつり残れども
院て女三の言は清浄の女三の言をあげりり申すけり
人をもよふもて解してゆめも入びるふらねく小侍様を
よびていりくきものこわくひ只おごりばあよとひもせよ
それあどのよの女三の清浄の殿ももよとトとたご今の

紫のよりの清浄に於て清と二条院ふねと一海路がよれ
ひまかりとひひすくせえはあまの道がくしていんねい
と海を何とつと約束してゆりぬつりあくと申はせあはて
を新しとれが加養のよりの清浄後あはといふらひん
見物の用意して四まると人すくあまばよれおと
只ひ柏木へ古右と一けきおねびつやほきまのびておりぬ
小侍後斗ひて几帳の障ふまなる女三の言とよらひん
ととこの言はる清浄氏のおりたると思はよあぬ人あり
それおはまると思して人言せと誰もあは只わあはれ行
そのよりに流れておとねがえあはね侍何らねよひと

は本月旦の後の夕のほど猫の猶めて清々然めをたうに
清めたりと云ふも一もむもめりつづけて相違ど露の返りも
とありてきりてしとして引かてたる由もいふにけりて
まどと云ふもいふも一もむもめりつづけて相違ど露の返りも
をいふもいふも一もむもめりつづけて相違ど露の返りも

つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて

つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて

つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて
つづくとおぼえりておぼえりておぼえりておぼえりて

尾の紙のきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす

血を流しながらふとあるべし。家父常侍御目とぬはるる事
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす
おのりたるのきりぎりすに袖づくまて共二の葉のきりぎりす

移しつらふ所ひきつ里朱雀院の所賀二月めと定まり
 かに紫のうらぬひ多ひて六月まで延ぬ六月より六月三日の
 賜りたまはば是を合て十二月におぬぬいせむりて奉承し
 延しづいふに何れ移ぬの樂を朱雀院までせよ等あり
 所賀よりなふ先相本所河角にそのあひ合はるふ
 けつびぬぬぬも人も婦にふせりていせむりにつけてわ
 びと娘いづか一人とあしおぐる所賀をけりりあふかーり奉承
 と奉りまづけしむとふち何れもとて奉りぬを又けりあし
 母父相大臣もあつひてそのいせむりぬいそんえぬふかく
 志はふのあつと奉りあつぬふせむりし是せい非ともいふ

免てほりりあふ試しぐまの奉りぬとていせむりぬいの時
 源をもあしつ所賀へける相本所子にあや海ちけりふ
 よりいとはしとて初し〜後し〜て人よりいせむり御
 給入りそ信しお母一人ちとる〜づり奉りまふ父おと母
 小の方そお新あかをいあひて承承ひいひり春生せむりあふ
 朱雀院の所賀の年けりぬいけり成巻にも朱雀院の
 所賀にまふ奉りまむとあつりぬいぬ奉りぬい

5



〇三十一



